

Title	後天的身体障害をもつチンパンジーにおけるリハビリテーションと福祉( Abstract_要旨 )
Author(s)	櫻庭, 陽子
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2016-11-24
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/doctor.k20049">https://doi.org/10.14989/doctor.k20049</a>
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

(続紙 1)

京都大学	博士（理学）	氏名	櫻庭 陽子
論文題目	後天的身体障害をもつチンパンジーにおけるリハビリテーションと福祉		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>近年動物福祉に関する研究は広がりを見せているが、より配慮すべき障害をもつ動物について体系的な研究はなされていない。またこのような動物を継続飼育する傾向が強い日本では、動物福祉だけでなく飼育スタッフの負担軽減も必要だ。本学位申請論文では、後天的身体障害をもつチンパンジーについてリハビリテーションと社会復帰の可能性を議論するため研究をおこなった。まず両後肢に障害をもつチンパンジーに対して、認知課題を利用した歩行リハビリテーションのための装置を設置した。結果、認知課題を利用することで自発的にリハビリテーションに参加するようになり、移動距離の増加および歩行様式の改善が見られた。さらにこのリハビリテーションを6年間継続しておこなった結果、経年により安定して参加するようになったが、季節や日ごとでモチベーションに違いが見られることもわかった。次に名古屋市東山動植物園で飼育されている左前腕を切断した個体と右前肢に麻痺がある個体の群れ復帰が試みられたため、障害個体および他個体の行動について縦断的な比較をおこなった。結果、群れ復帰では障害個体に順次個体を出会わせ同居させていく方法が有効であることが示された。また左前腕切断個体では移動の減少、右前肢麻痺個体では採食の増加、休息と社会行動の減少が見られた。一方グルーミングでは、両障害個体ともグルーミングをする割合が減少したが、他個体からグルーミングを受ける割合には有意な差は見られず、群れ内の健常個体の行動にも大きな変化は見られなかった。これらより後天的身体障害をもつチンパンジーにおけるリハビリテーションと社会復帰の可能性が示された。動物福祉の観点から特に欧米では「安楽殺」が選択される場合も多いが、本研究によりその個体の視点に立った「リハビリテーション」「社会復帰」も福祉を考える上で有効な方法の一つとなりうることが示唆された。</p>			

(続紙2)

(論文審査の結果の要旨)

欧米では、後遺障害が残るような傷病が発生すると、飼育動物の苦痛の除去を重視して、安楽殺が選択される場合が多い。しかし、リハビリテーションという発想を導入することによって、苦痛の軽減と機能回復・維持を果たすことにより、障害をもった個体の福祉を向上させる可能性を排除すべきではないだろう。野生では、身体障害をもつ個体が群れ内で生活している場合もあるが、飼育下では障害をもつ個体にかんしての動物福祉の観点からの体系的な報告がほとんどないのが現状だ。ヒト以外の動物を対象としたリハビリテーションの基礎的・実践的研究の必要性が強く指摘される。申請者は、このような目的意識のもと、後天的身体障害をもつ飼育下のチンパンジーを対象として、リハビリテーションと動物福祉にかんする研究をおこなってきた。

まず、京都大学霊長類研究所で急性脊髄炎を発症し、両後肢に障害が残るチンパンジーを対象に、認知課題を利用した歩行リハビリテーションにかんする研究をおこなった。個体の特性にあわせて課題設定を調整した結果、自発的に歩行リハビリテーションに参加するようになり、移動距離が増加するとともに歩行様式にも改善がみられた。また、維持的リハビリテーションとしての効果を探るため、長期間にわたる行動変化についても調べた。課題遂行において、年ごとの変動、季節変動、および日内変動があるものの、認知課題による歩行リハビリテーションへの自発的参加が長期間にわたって安定的に見られた。

続いて、障害をもつ個体の社会復帰の過程について検討するため、名古屋市東山動植物園で飼育されているチンパンジー2 個体を対象に研究をおこなった。左前腕を切断した個体と、右上肢に麻痺がある個体の群れへの復帰過程について、他個体の行動を含めて発症前から縦断的に分析した。その結果、障害個体の群れへの再導入では、段階的に同居個体数を増やしていく方法が有効であること、および障害の種類・程度によって移動の減少などの行動変化があることがわかった。また、障害個体がグルーミングをおこなう頻度は減少したものの、他個体からグルーミングを受ける頻度は変化しないなど、群れ内の健常個体の行動には大きな変化が見られないことがわかった。

本研究は、障害をもった飼育チンパンジーの各事例について、リハビリテーションや社会復帰によっておこる行動変化にかんして量的な指標により検討し考察をおこなった、という点で高く評価できる。また、これらの検討を通して、障害個体の順位・性別、および障害の部位・程度・隔離期間、苦痛の評価など様々な要素の組み合わせによる個別的対応の必要性も指摘された。その点でも本研究は今後生じるであろう同様の事例の蓄積と評価の礎となるものである。本論文によって、欧米型の安楽殺とは異なる、リハビリテーションと社会復帰という方策をとることで、障害をもつ個体の動物福祉を向上させることが可能であることが明らかになったと言える。ヒトで確立されたリハビリテーションの理論・手法などを基盤として、「比較リハビリテーション科学」という新しい視点を提唱した非常にユニークな研究である。

よって、本論文は博士(理学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年9月8日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 平成28 年 11月 24日以降